

「悲劇の木曾馬 二千年の足跡」

平成26年10月18日

於 高森町歴史民俗資料館時の駅

講師 高森町史学会会長 北村重信氏

皆さまこんにちは。ご紹介をいただきました北村でございます。

10月も半ばを過ぎましてだいぶ秋も深まってまいりました。9月27日には木曾の御岳が大噴火をいたしまして、63人という死者行方不明者が出ました。私と、今日のスライドを作成された林喜弘さんと二人で、御岳山麓の開田高原などを回ったのが、噴火のちょうど前日でございまして、もう一日遅れたら灰を被っていたかも知れません。自然災害の怖さを身に沁みて感じている所であります。

1 はじめに

私が木曾馬に関わりを持ちましたのは、ちょうど40年前の昭和49年でございます。最後の純血木曾馬といわれた「第3春山号」が老衰で倒れ、名古屋大学農学部で安楽死をさせられるということになりました。私はたまたま新聞社におりまして「君この取材をしろ」と命令されました。家族ともども木曾福島に転勤しまして1年余り「第3春山号」と木曾馬を取材しました。

こんな関係で、木曾馬に大変興味を持ったわけでございます。山間地の大変優れた農耕馬として農家に可愛がられ、2000年もの長きにわたって生命を伝えてきた大型家畜の木曾馬が消えるというので、全国的にも大きな関心呼びました。新聞やテレビの報道で「第3春山号」がはく製になることを知った全国の皆さんから、「可哀相だからやめろ」あるいは「何とか厩に置いて生命を全うできないか」、このような手紙が関係者のもとへ寄せられたのを覚えております。はく製にした方については後ほどご説明を申し上げたいと思います。

年輩の方ならご存知だと思いますけれども、昔は私どもの近所でもたくさん馬を飼っておりました。おそらくそのほとんどが木曾馬ではなかったかと思っております。広い農家の玄関脇に厩があって家族の一員のように馬がおりました。大正から昭和にかけて6000頭から7000頭の木曾馬が飼われていたそうです。最盛期には10,000頭もいたという記録もあります。ところが日本が日華事変から第二次大戦へと戦争を拡大するにつれて、小柄な木曾馬は軍馬には向いていないと、大型の外国種を入れてどんどん改良を進めました。そして「第3春山号」を最後に純血の木曾馬が消えていったのです。その後、戻し交配をしまして、現在は全国に160頭ほどの木曾馬がおります。このうち60頭は木曾に飼われておまして、今は純血とは言わないんですね。「純系木曾馬」と呼ばれています。

先日高遠で古書祭りがありまして、いろいろな資料を調べてきたんですが、その中に昭和11年の市田村と山吹村の馬の資料がありました。それによりますと、当時の両村の戸数は804戸で、なんと537頭の馬が飼われておりました。内訳は、農耕用が454頭で、賃馬と言って荷物を運んでお金を取るという馬が83頭いたそうです。804戸と言ってもその中には商店もありますので、一軒で2頭以上の馬を飼っていた農家もいたんじゃないかと思っております。明治から大正にかけて高森町でもたくさんの馬が飼われていたことが、この数字でも想像できると思います。今は、高森町はおろか下伊那中を探しても、全く馬を見かけない世の中になってしまいました。

2 日本の在来馬

お配りした資料に基づいてお話をしていきたいと思っております。日本には8種類の在来馬がいるんです。この在来馬というのは外国の種馬を交配しないで残った日本特有の馬を言うわけです。北から

- ①北海道和種、通称道産子という馬ですが、これが現在一番多くてほしい1255頭ほどおります。
- ②次が長野県と岐阜県飛騨地方の木曾馬です。純血はいなくて純系が、先ほどお話したように160頭ほどおります。これらの馬は全て「第3春山号」の系統で、昭和58年に長野県の天然記念物に指定されましたが、だんだんその指定された馬が亡くなりまして、現在は半分ほどしかおりません。
- ③それからずっと南に下がりまして四国に野間馬（愛媛県今治市天然記念物）というのがあります。
- ④九州へいくと、御崎馬（宮崎県都井岬）と、⑤対州馬（長崎県対馬）です。御崎馬は国の天然記念物になっています。対州馬は現在20頭程しか残っておりません。

⑥それから鹿児島県へ行ってトカラ馬です。

⑦沖縄には宮古馬と⑧与那国馬がいます。

宮古馬というのは、現在 20 頭ほどに減ってしまっていて、8 種類の馬を全部合わせても 1,900 頭程と言われております。これらの馬はいずれも、海辺や山間の厳しい環境の中で飼育されてきたために、いわゆる外来種との交配がなかったためにこういう純粋な馬が残ったわけです。

3 木曾馬の特徴

木曾馬は中型馬と言われているのですが、この中型馬の中でも一回り小型なんです。体高が 133 センチくらい。体重が 350 キロから 400 キロ。長い年月をかけて厳しい環境の中で、半野生的に育ってきたために後ろ足が X 状になっています。これは、急な山坂とか山道で滑らないようにと、木曾馬が自分で身につけて改良していった体型なんです。また木曾馬の腸は太くて、他の馬より 30 センチほど長いんですね。この膨らんでいるお腹を草腹と言いますが、山野草を食べて消化が良いように膨らんだお腹をしているんです。だから栄養を蓄えて非常に強健だったというわけです。山間地の農耕馬として重宝され、可愛がられてきたわけです。木曾馬の性質は非常に温順なんです。おとなしい馬で子どもや女性になついたと言われております。木曾馬を飼うのは主に女性だったんですね。女性の方たちが大事にしたためにだんだん母性本能というのを身につけて、温順な馬になっていったんです。厩は家の中にありましたから、馬の様子がいつも手に取るように見えたわけです。木曾の農家では、居間でお嫁さんとか女性の座る場所が一番厩に近い所と決まっていて、絶えず米のとぎ汁とか野菜くずを与えていました。温順な木曾馬は子どもの遊び相手でしたし、大変家族に可愛がられてきたわけです。

次のような話もあります。「嫁を貰うなら馬飼いで上手な娘をもらえ」と。昔から、馬飼いで上手な娘は良い嫁だと言われ、大切な馬を可愛がって、財産を増やしたそうです。嫁が馬のほっぺたを叩いたという理由で離婚されたという話も残っています。それくらいその頃の農家にとっては、馬は大事な一員だったということが頷けるだろうと思います。

木曾馬は自分が住んだ厩とか、長く育ててくれた持ち主の所へ戻るといふ帰巣性があります。他所の農家に売られたり他所の牧場に放されたりした馬が 30 キロも 40 キロも歩いて家へ戻ってきたという話も残っています。山なんかへ連れて行って草刈りを終え、帰りに飼い主が手綱を放してやると木曾馬は自分で道を覚えていて家へ帰って行けたそうです。そういう利口な馬でした。それから木曾馬は感覚が鋭いんですね。山崩れ・地震や噴火があると夜泣きをしたり、落ち着かず厩の中を回って歩いたり、そういう習性があったそうです。昔のように木曾馬がたくさん飼われていたら、御岳の噴火もきっと予知してくれただろうと思います。木曾馬は非常に感覚の鋭い、予知能力のある馬だったんですね。

4 木曾馬の起源

木曾馬はいつ頃、どこから来たんでしょうか。

いろいろな説がありますが、だいたい 2 世紀から 3 世紀頃に朝鮮半島から渡って来た「蒙古草原馬」というのが定説になっています。

スライドに写っているのは現在の蒙古馬なんですが、木曾馬の体形に似ていますね。この先祖が日本に渡ってきたというのが説になっています。

日本書紀に「第 15 代応神天皇の 15 年に百濟王直岐を遣わし、良馬二疋（牡 1、牝 1）を貢ぐ」というのが出てきます。これは朝鮮半島から日本へ馬を贈った最初の記録なんですね。木曾馬については江戸時代の「和漢三才図説」に登場するのが最初です。これを読みますと、今から 1842 年前の「第 27 代安閑天皇の 2 年（532 年）馬を科野国霧原牧に放ち、いささか馬に乏しからず」とありますので、いささか馬に乏しからずというのは、相当な数の馬がいたということなんですね。この霧原というのは旧木曾郡神坂村湯船沢に霧ヶ原という地名があるんです。越県合併致しまして、現在は中津川市になっていますが、この辺りは木曾谷の最南端で木曾谷でも非常に温暖な地域だったということで、ここでたくさんの馬が放牧されたということです。天智天皇の時（615 年）には、「この牧より馬 20 頭を朝廷に奉る」、こういう記録があります。こうした歴史的な経過から見まして、やはり木曾馬の発祥地は霧原だと。今は中津川地籍になっている木曾谷の南端の「霧原牧」と言われております。

時代は下がりまして、馬を放牧する牧の制度が出来たのが、今から 1313 年前の文武天皇の時代なんですね。皆さんも知っている「大宝律令」によって「厩牧令」というのが出来ております。これが馬飼いか馬の放牧についての、日本で最初の掟なんです。そして平安時代に移って醍醐天皇の時代になると、「厩牧令」を改めて「御

牧貢馬の法」が定められております。霧原牧場に「馬寮」といって馬を飼う厩を設け、牧官という役人を置きました。牝馬 100 頭を飼育し、60 頭を目標に仔馬の生産が行われたということが出てきます。こうして木曾谷を南から北へだんだん木曾馬の生産が本格的に始まっていったのです。

5 木曾義仲と木曾馬

木曾義仲と木曾馬についてお話ししてみたいと思います。ここに出てくるスライドは、木曾義仲が幼少の頃育った日義村、その日義村の「木曾義仲館」にたくさん資料が展示されております。やはり木曾を代表する武将と言えば、平安末期の旭将軍、木曾義仲ですね。そして巴御前が有名です。人形ですけども、これは巴御前、これは木曾義仲ですね。あれは、德音寺にある巴御前が馬にまたがっている図です。その上も巴御前の武者姿です。木曾にはこういう義仲の資料がたくさん残っています。義仲は武蔵国、埼玉県秩父の生まれでして、父の源義賢が同族に殺されてしまうんですね。義仲は幼少の名前を駒王丸と言ったんです。武蔵国から逃れて、木曾の有力者だった中原兼遠という豪族を頼って木曾へ逃れてくるわけです。ところがその兼遠の娘が巴御前でして、二人は木曾駒高原で木曾馬にまたがって訓練をしたということです。駒王丸は源氏の血を引いていたので、大変馬の操りがうまかったと。巴御前も女ながら馬の上から鳥を射落したというすごい女性だったようです。二人で絶えず高原を駆け巡って馬の訓練をしたという伝説が残っております。義仲（駒王丸）は元服して、「源次郎義仲」と名乗って、「旗揚神宮」で旗揚げをして、木曾の開田から岐阜の飛騨を越えて、今の砺波へ出て、平家討伐のために京都へ上っていくわけです。現地へ行きますと、旗揚げをした時に植えたという大ケヤキが残っております。皆さんも機会があったら一度ご覧になったらいいと思います。この京へ攻め上った時の木曾義仲の騎馬隊は千とも数千騎とも言われております。そのほとんどが山岳戦に強い木曾馬だったんですね。これについてはいろいろな説がありまして、木曾馬では戦いに勝てないから他から馬を調達したのではないかという説もあります。事実、義仲は旗揚げの前に、わざわざ東信の佐久平へ行って、木曾馬より一回り大きい馬と、兵を集めているんですね。昔から佐久とか群馬は、良馬の産地だったんです。佐久地方の豪族も義仲に従って戦いに参加したと。これは確かなようです。義仲は例の倶利伽羅峠の戦いで平家の大軍を打ち破って、京へ上がるんです。ところが従兄の源頼朝や義経がこれを妬んで、近江（今の滋賀県）の栗津ヶ原の戦いで義仲を討つんですね。スライドに出ているのが戦いの様子です。この時義仲が乗っていたのは木曾の名馬と言われた「鬼草毛」という木曾馬なんです。たまたまこの馬が沼に足を取られて倒れちゃった。僕が推察するには、木曾馬は脚が短くて沼田から出られなかったんじゃないかと思います。すかさず鎌倉の武士たちが来て首を取ってしまうんです。このことは平家物語にも出てきます。このスライドは沼田で義仲の木曾馬が動けなくなって、鎌倉方の兵に撃たれる寸前の貴重な絵です。この絵は木曾義仲館にありますから、機会があったらご覧いただきたいと思います。平家討伐には、巴御前も義仲と一緒に、丸い銭型の毛並みの「連銭草毛」に乗って参戦しています。皆さんは巴御前と言うと義仲の奥さんだと思うけれども、違うんです。義仲には別の奥さんがいるんです。巴御前は正室ではないんですね。

この時代、木曾馬の種類は、白い系統が多かったんですね。それで草毛とか月毛とか佐目月毛とか。

栗津ヶ原の戦いで義仲が討死した後、木曾家は滅びて一族は全国に散らばって隠れ住むんですが、やがて木曾に戻って木曾家を再興しました。そして木曾家は 19 代の木曾義昌まで、410 年間にわたってこの木曾谷一円を支配したんですね。この間、木曾馬の頭数はだんだん増えてきて、木曾馬は木曾氏の大きな資金源になって行くんです。ここで木曾氏が目を付けたのが、「毛付け馬制度」です。毛付けというのは馬の産地なんですね。「毛付け馬制度」を設けて馬の年貢を徴収するんです。毛付け馬制度は今でいう牧畜税とか畜産税ですね、そういう税金を徴収していたという記録が残っています。今から 460 年前の永禄 11 年に、木曾の大桑村に定勝寺という名刹がありますが、ここの修理をした時に大工賃に王滝村の二子持から納めさせた毛付け馬を与えたという記録が残っています。金が払えないから、馬を持ってきて賃金とし支払ったのです。また 430 年前の天正 10 年には、木曾義昌が、当時の黒川村と言いますから木曾福島町の黒川ですね、ここに出した「毛付けのもの也」という文書も残っていて、馬の年貢を徴収したということがきっちり記されております。やがて戦国時代に入って行きますと、武士が競って木曾馬を買い集めることになるんですね。ですから木曾氏はどんどん豊かになってきたと思われれます。ところが長く続いた木曾氏も、徳川家康の不信を^{かつて}嘗て、お家断絶となるのです。

6 山村氏と木曾馬

この後登場してくるのが山村氏なんです。木曾代官と呼ばれ、木曾一帯を木曾氏に代わって治めて行くわけで

す。慶長年間から明治まで、13代274年間でした。

初代木曾代官を命ぜられたのは、関ヶ原の合戦で徳川方に味方して勝利した良利^{たかとき}という人でした。3代目の良勝^{たか}が二条城で家康にお目通りをして「お前に褒美として木曾馬と鷹を与えるがどちらがよいか」と聞かれたそうです。ところが良勝はいろいろ考えて、家康は鷹狩りが好きだから、いずれ献上しろというに相違ないと。それより経済性のある木曾馬をくれとこう言って馬を貰ったんです。良勝^{たかかず}は非常に先見の明があったんですね。鷹なんか貰うより馬を貰った方がいいと。それで山村氏は木曾馬を貰って、木曾氏が作っていた毛付け馬制度をそのまま引き継いで馬の年貢を取るわけです。

ところが、木曾はご承知のように尾張藩なんですね。尾張藩も「いやあ木曾の山村は馬で儲けておる」と。上納金を納めろということで、年間300両の、当時運上金と言ったんですが、このお金を尾張藩に納めさせるんです。300両は大変なお金だったんですね。山村氏は、とてもこれは納められないというんで、ますます農民から馬の年貢を厳しく取り立てます。農民は大変泣かされたと伝えられています。

寛文年間になりまして、山村家4代に良豊^{たかとよ}という人がいるんですが、この時に尾張藩は木曾馬の召し上げを考えたようです。良豊^{たかとよ}はそれに気づいて「ちょっと待て」と。「木曾馬は祖先がご朱印を頂戴して私で4代目になる大切なものだ。困る」ということを尾張藩の有力者に文書で申し出ます。「いやわかった」と。「そうか、ご朱印を頂戴してお前様が木曾馬を貰っているんだ。これは手がつけれんから自由にしたまえ」と。こういう確約をとっています。

戦国時代になって、どんどん木曾馬が武将たちに買われて、良い馬はみんな買われて行っちゃうんです。そうすると残った馬はへばい馬で、だんだん品質が落ちてくるんです。木曾馬がピンチになってきます。これは困るぞというんで良豊^{たかとよ}は、奥州の南部馬の牝馬30頭を買い入れて、毛場（主産地）と称する開田、三岳、王滝、黒川、上松など当時の木曾16ヶ村に配置して、初めて木曾馬改良を試みるわけです。しかし種馬を買い付けなかったのが、木曾馬全体の体力の品質が向上しなかったんです。だから元禄時代には木曾馬が減って、元禄2年にはいよいよ尾張藩に納める300両が納められなくなって、150両にまけろと申し出て、「仕方がない」ということで、尾張藩は半額にまけているんです。そのぐらい木曾馬がピンチになっていたという記録が残っております。

ここにきて木曾代官の山村氏が考えたのが「留馬制度」と言って、良い馬を他所へ出さないように留めておくという制度を設けたんですね。これで毛場という馬買いの所の取り締まり強化を図りました。毎年秋にその年に生まれた当歳駒を検査場所に集めて、代官のお役人が一頭一頭検査して、毛並や体格などを記入した馬の戸籍・馬籍を作るんです。この検査を「毛附改め」といいました。今でも、開田に行きますと毛附原という名前が残っております。昔馬を集めて検査をした場所です。

文化年間以降になりますと、この毛附馬制度がさらに厳しくなって、馬の飼い主に対して、検査記帳した以外の馬は隠したり密売したりしてはいけない、病気や怪我で死んだ馬は検視を受けろなど義務付けをして、木曾馬の自由売買を厳重に禁止した記録も残っております。

また、毎年7月に木曾代官所に2歳馬を集めて検査をして、不良の馬はたてがみを切って売っていいと。それから良い馬は留馬として残して、飼い主にもう一年飼いなさいと。そして3歳馬まで飼わしてもらう一度検査をして、その中から優秀な木曾馬を20頭程選んで毛附馬とし、山村氏が持ったり将軍に献上したりして良い馬を保存していくわけです。

この頃は特別に木曾馬の種馬というのはいなくて、飼育した中の留馬から毎年良い馬を選んで、それを隔年置きに何年か放牧しておいて、自然交配でどんどん良い馬を育てました。そういう知恵を使って優良な木曾馬を作ったのです。

やがて、江戸と京都を結ぶ大動脈の中山道が開通すると、山深い木曾谷も人の往来が激しくなって旅人や役人が通るようになり、大街道になりました。木曾には妻籠・馬籠からずっと贅川まで11宿ができたんです。この11宿を通る役人などの荷物を運ぶために、伝馬という制度を設けました。徳川幕府は一つの宿について人足50人と馬50頭を用意しておくと、通達を出すんです。幕府の言うとおりにしていますと人足550人、馬は550頭

必要ですからね、そんなことはできないということで、何回も陳情して馬の数や人足の数減らして貰ったという記録も残っております。皇女和宮が通った時には480頭の木曾馬を用意したんです。その時には飯田下伊那からも応援を得ているんです。これは島崎藤村の「破戒」にも出てきますね。

木曾の馬市ですが、いつ頃から始まったのか調べてみると、やはり江戸時代の中頃から始まっています。それまでの約100年間はみな庭先取引だったんです。馬持ちの主な人たちが、木曾代官所の許可を受けて不定期に馬

の売り買いをしていたんです。ところが今から260年ほど前の寛永3年に、7月初めの半夏生^{はんげしょう}の頃の3日間を馬市に決めたわけですね。人々は半夏市と呼んでいたんですね。この市では2歳馬と3歳馬が売られておりました。中には、木曾代官の留馬制度の検査で不合格になった馬や、山村氏から与えられた毛附馬の飼育に困って、馬市に出されたというような馬もいたそうです。この頃の市場では、三歳馬を中馬と言って、この馬を求めて全国から仲買業者が集まってきました。山村氏は「馬政所」を設けて、馬一頭につき銀三匁を徴収していたのです。

表現は良くないんですが美濃博労^{ひのう}といって、岐阜県的美濃の博労がものすごく目利きが良かったんです。これが良い木曾馬をみんな買い取って行ってしまおうんです。もう美濃博労が来ると売る方もたじたじだったというような話が残っています。

昭和の初め頃までは、袖下取引でした。値段の取引をするが、なかなか決まらない。袖の下で飼い主と買い手が、そこにいるばんぞう人、これは誰でもいいんですが、その人に頼んで、仲立ちをしてもらうんです。両方の袖口に手を入れて、「お前は幾らだ。よし俺は5両だぞ、で、こっちの買う方は4両だ」と。それを聞いて、ばんぞう人が仲立ちをして木曾馬の売買を成立させたんです。ところが美濃博労は取引がうまくて、だいたい売る方の農家が負かされてしまったという話も残っております。

昭和10年になりまして、県条例で馬の袖下取引は駄目だよと、競り市でやれということが公布されて、袖下取引は消えていくわけです。

7 馬の小作制度

木曾は生活環境が厳しい所で、農家は苦しい生活をしていました。木曾馬の里と言われた御岳の麓の開田や王滝などは、度重なる冷害がありまして、天明の大飢饉など江戸時代は3回も大きな飢饉を経験しているんです。それで農家は自分で馬が飼えなくなってしまったんです。そこで始まったのが馬の小作制度です。当時木曾では馬持ちを馬地主と呼びました。馬を借りている農家を、馬屋元(馬小作)と言ったそうです。明治に入りますとこの馬小作、馬地主の制度が急激に広がって、馬小作の農家は馬地主から借りた馬でたい肥を作って、農耕馬として使用して暮らしを立てていたと。そして仔馬が生れると、馬市に出して売れた代金にながしかの利息を付けて、馬主に支払った。それでまた馬主・馬問屋はその金で馬を買って貸し付けていたのです。村によっては飼っている馬の75パーセントが小作馬だったという記録が残っております。当時馬地主で有名だったのが、木曾福島に千村勘兵衛という人がおまして、屋号を越中勘といいました。この人は最盛期には1000頭を超える馬を持って貸し付けていたそうです。だいたい開田には薬問屋をやって儲けて、300頭くらいの持ち馬を持って貸し付けていた人もあちこちにいたようです。

明治13年に、明治天皇が木曾を視察されて、木曾馬をご覧になり、2頭を御料馬としてお買い上げいただいたのです。千村勘兵衛は「これは光栄だ。後世に伝えなければ」と、立派な額を作り、開田村の丸山観音に奉納して、今も残っています。天皇陛下に買い上げていただいたのは、木曾馬にとって大きな誉れでした。

ところが大正時代になりますと、だんだん木曾馬も減ってきて、馬小作が馬地主に納めておいた6・4の代金も折半になってきました。で、馬地主もこれでは儲からないということで、遂に100頭以上持っている馬主はいなくなっていきます。木曾はああいう狭い所ですので、古くから住民の信頼関係が篤かったんですね。馬地主と馬小作との間に契約書というのは一通もないんです。銀行から金を借りるように、べたべたハンコを押して保証人立ててという契約書はなくて、みんな信頼関係で貸し借りをしておったんです。いったん地主と小作の関係ができますと、親戚以上の付き合いになって、日常の相談から冠婚葬祭まで深い付き合いができました。馬地主は小作が金に困ると、何をおいても金の工面をしてやりました。

私が親しくしていただいた、木曾馬市の立会人で、旧黒川村の村長をやった故黒田三郎さんも馬地主でした。「すごかったぞ。馬小作が借りに来るとうちの親父は何事をおいても銀行へ行って金を工面し、お土産まで渡して帰したぞ」と、言っておられました。そういう付き合いだったんです。貸した馬が死んだり、怪我をして医者にかかったりした時は、全部馬地主の負担だったそうです。小作には何も迷惑はかけなかった。言うなれば、そ

れだけ馬地主が儲けておったということかも知れません。

8 木曾馬の改良

明治 19 年には国と県の指示で、木曾馬の本格的な改良が始まるんです。奥州から木曾代官以来 270 年ぶりに奥州南部馬の牡 11 頭と牝 9 頭を導入。木曾馬産組を設立しました。さらに南部馬の頭数を増やして外国系の馬も入れ、木曾馬の改良をどんどん図ります。今考えてみますと、この時が木曾馬の悲劇の始まりでした。

木曾馬は温順で粗食で、山間地の農耕馬として需要が高かったんです。県内では木曾や上下伊那、それから諏訪や松本方面、さらに岐阜愛知、山梨にも及んでいたんです。ところが大型馬に改良してから、木曾馬は気性が荒くて使えん、こんな馬はいらんと。木曾馬は売れなくなっちゃうんです。農家は大打撃です。当然のことながら反発が上がるんです。「こんなことしていたらわしらは食っていけない」ということになりました。大正時代に入ると、「馬匹去勢法」という恐ろしい法律ができちゃうんですね。木曾馬については、国の検査に合格した馬のみを牡馬として使用して、不合格のものは全部去勢しちゃったんです。

昭和 12 年には「種馬統制法」というのを制定して、木曾馬の種馬は、全部外国の馬ということになったんです。これは即ち、戦場で使いやすい軍馬を作るために、2000 年近い歴史を持ち、家族同様に育ててきた純血木曾馬を絶滅に追い込んでしまったのです。

9 戦争と木曾馬

いくら戦争のためとはいえ、こういう人間の身勝手とか非情さには、胸の痛くなる思いがしますね。木曾馬が戦争に駆り出されたのは、昭和 12 年の日華事変からです。満州事変の時には木曾馬は小型で軍馬には使えないから、というんでお呼びがかからなかったんです。それが日華事変になると、なんと木曾谷から 800 頭以上の馬が引っ張られていったんです。開田村では 300 頭以上の馬が連れていかれました。私たちの高森町からもたくさんの馬が徴用されたと思います。当時は中津川に検査場がありまして、そこへ馬を連れて行ってここで合格した馬は、名古屋へ送り、そこから戦地へ連れていかれました。農家は手塩にかけた愛馬との別れで、大変つらい思いをしました。

木曾馬については涙を絞るような話があるんです。木曾の開田に中村伝さんという熱心な馬飼いの農家がありまして、ここに山吹号という木曾馬が飼われていました。この馬が昭和 12 年の夏に、日華事変の軍馬に徴用されて行きました。間もなく中村さんのもとにも召集令状が来て、中国大陸に出征していくんです。中国も寒くなった 11 月の初め頃、石家荘という町に行った時、部隊の駐屯地の中に厩があって、全国から集められたたくさんの馬がいたそうです。馬好きな中村さんは早速馬の様子を見に行ったら、その中の一頭が人を呼ぶように鳴いたと。見ると栗毛の馬でした。前足で地面を激しくかきはじめました。偶然にも 3 カ月前に涙の別れをした山吹号だったんです。この山吹号は中村さんが 8 年間、我が子のように育てた温順な木曾馬でした。戦地に行っても飼い主の臭いをすぐ思い出して、鳴いたんだと。恩を忘れなかったんだと思います。中村さんは人參を集めて来たりして与え、「山吹、元気でおれよ」と言って厩から離れました。山吹号は低い声で悲しそうに鳴いていたそうです。山吹号は重い軍事物資を積んだ荷車を曳いて奥地へ進んでいきました。軍馬は厳しい山岳戦に重い荷物をひいて従事していたんですが、みな大陸で倒れました。山吹号もその後の消息は分かりませんから、戦地で命を失ったのではないかと思います。

戦国時代から、昭和の第二次世界大戦まで、戦争に駆り出された大型家畜は馬だけなんです。馬は戦死しても恩給も何も付きません。馬死というのはこの事なんですね。木曾馬は無理やり軍馬に改良されて、戦場に引っ張っていかれて命を落としても、墓一つないんです。長年木曾馬を飼ってきた開田村の人たちは、なんとか馬の霊を弔ってやろうと、昭和 25 年に軍馬の碑を建てました。大きな碑で、南無馬頭観世音菩薩と刻み、裏面には「大事な馬よ。物言わぬゆえにお前に感謝する」と刻まれています。軍馬の馬頭観音は、日義村や木祖村にもありますが、昭和 25 年半ばになって建立された軍馬の碑は、全国でも開田だけだと思います。これを見ていると、木曾馬の里の人たちの優しさがしのべれます。

10 最後の純血種「第 3 春山号」

木曾馬保存会長で、元開田村村長をされた故伊藤正起さんという方がいました。東京のお寺の息子に生まれて、開田村の親戚に養子に来るんです。昔の東京獣医学校、今の日大の獣医学部を出た獣医で、この人が中心になって、木曾馬の保存運動を起こしました。伊藤正起さんからお話を聞いたんですが、昭和 25 年の春、ある国会議

員を通じて、長野市更埴に八幡武水神社というお宮がありまして、そこに奉納されている神馬が純血木曾馬の牡馬、「神明号」でした。それを見付けだしたんです。伊藤さんたちは早速、この神馬をなんとか譲って欲しくないかと、木曾馬復活のために必死で頼みまして、神社が「それなら良からう」と承諾して、木曾へ払い下げてくれました。

この神明号が何故残ったかという、この神社は、日本が勝つために軍人を祀った神社だったんですね。そのために神馬は去勢を免れ、残ったんです。この馬を木曾に払い下げてくれたんです。この神明号を早速貰ってきて木曾福島近在の農家で、純血木曾馬の牝馬、「鹿山号」が残っていたので、それを母親に交配して、昭和26年4月8日、御釈迦様の誕生日に「第3春山号」が生まれるんです。この頃は木曾も春で、季節にふさわしい「第3春山号」という名前を付けたんです。

こうして、国策のために絶滅の危機にあった木曾馬が、じつに十年ぶりに復活したわけです。ところが昭和30年代になりますと、農家に耕耘機が普及してきました。それから馬に代わって肉質の良い牛の方が、ハムの原料などによく売れるというので農家も馬飼いを嫌っていくんです。結局木曾馬は実用性のない家畜だということで、一気に減っていくんです。せつかく生まれた「第3春山号」も殺されそうな時期がありました。これは可哀相だし、大事な馬だから残さにといいことで木曾馬保存会の皆さんが努力しまして、幾軒かの木曾の農家で飼われて、最後に終の棲家として来たのが、木曾開田の故柘植清一さんの厩でした。「第3春山号」はじつに700頭の木曾馬の子孫を残すわけです。この功績により、日本動物愛護協会から表彰もされております。

昭和49年の暮れに老衰で倒れて危篤状態になってしまうんですが、この時「第3春山号」は馬の年齢でいうと24歳です。馬は人間で言う4歳ずつ歳をとっていくと言われますからもう90歳を超えていたんです。当時開田村長だった伊藤さんや木曾馬に関わりのあった人たちは、名古屋大学農学部富田武教授に相談しまして、「じゃ學術解剖のために安楽死をさせて、内臓や骨は大学に残そうじゃないか」ということになりました。「第3春山号」がこの安楽死の旅立ちをしたのは、昭和50年1月14日の小正月でした。私はちょうど一年余り木曾馬を取材してきて、その時の光景を覚えております。この日の開田村はまばゆい雪晴れでして、村の集会場でお別れ会が開かれました。大勢の村民が集まってきて、柘植さんが「おい春山よ、長い間ありがと。今日でお前ともお別れだよ」と声をかけ、手綱を持ちますと、利口な春山号は永久の別れが分かかってか、涙をボロボロ出し、足をしっかり踏ん張って動かないんです。柘植さんは自分で編んだ藁靴を、足が滑らないように履かせてやりました。そして、「送りましょうか 送られましょうか、せめて峠の茶屋までも〜 木曾の馬子歌を歌って、愛馬との別れを惜しみました。

2000年も続いた純血木曾馬が消えていくというので、みんな泣きましたねえ。当時滋賀県に、須川はく製アートという、はく製会社があったんです。社長は須川常史さんという方で、小学校の息子さんが、たまたま私が書いた「第3春山号安楽死の旅へ」という新聞記事を読んで、「お父さんこの馬をはく製にしたらどう」と提案をしたんです。木曾馬保存会でも、安楽死した第3春山号の皮とひづめだけは貰ってきてはく製にし、村に永久保存したいと考えていたんです。ところが金がなくて困っていた。須川さんは「それでは私に無料でやらせてください」と保存会へきて伝えたんです。木曾の衆は感激して「お願いします」ということになりました。須川さんは何度も何度も木曾へ足を運んで、木曾馬に関する資料を集めて、皮とひづめを引き取って不眠不休ではく製にしました。第3春山号そっくりのはく製です。このはく製が木曾に戻ったのが、春山号の誕生日と同じ昭和50年4月8日でした。御釈迦様の誕生日です。今このはく製は開田村の郷土館に展示されております。牛馬の死は三代崇ると言われますが、この第3春山号が安楽死した後、この馬に関係した方々の間に不幸が続きました。当時小学5年生だった私の娘も重病になりました。私は取材をしただけなんです馬に関わったということで、娘は1年以上入院しました。須川さんも間もなく心筋梗塞で亡くなりました。42歳でした。私も葬式に行きましたが、玄関のわきに網の小屋がありまして、そこに雀がいっぱいいるんです。「あれこの雀は」と見たら、みんなはく製なんです。それくらい腕の良い方だったんです。小柄で紳士で、今でも須川さんの姿が目には浮かびます。それから飼主の柘植さんも重病になりました。ある人は赤ちゃんが急死。みんな大変でした。「やはり木曾馬の祟りなんだなあ」という声が聞かれました。長く暮した動物を粗末にすると祟りがあるということは、今の人たちに言わせると、「そんなの迷信だよ」というかもしれませんね。

1.1 馬の甲いと馬頭観音

木曾の人たちは、馬を大事に甲ってきました。木曾には、「親の石塔は建てなくても馬の石塔は建てて祀る」という教えがあります。同じ屋根の下で暮らし、農耕馬として一緒に家族を助けてきた木曾馬への感謝の気持ちだ

ろうと思います。

馬は体重が 300 キロ以上ありますから、死んだ馬はトンボという棒を作って 8 人で吊るして担ぎます。馬の墓場は人家からあまり遠くない所にあるんですよ。それぐらい近くに置いておきたいということです。当時は重機もなかったから大変でした。担いで行って葬って、その後に担ぎ棒を立てて鎌を備えてやりました。鎌は、あの世に行ってもしっかり草を刈って腹いっぱい食べろよ、食べ物に困るなよということです。それから花やお餅や馬の好きなものを供えて、蚊いぶしというものを吊るしてやりました。馬は山の中でどうしても蚊に刺されますね。蚊いぶしは木綿の布を藁で編んで、それに火を付けて、馬を葬ったんです。死んでも家族の一員でした。

私の近くにも、飯田市座光寺の大門原に昔馬を葬った所がありまして、馬捨て場と言いました。今でも残っています。木曾にもあちこちに馬の墓場がありました。

馬頭観音は馬が飼われた時代の名残です。全国各地にたくさんの馬頭観音があります。病気や事故で亡くなった馬の霊を慰めたり、馬の健康を願ったりして建てたものです。木曾には馬頭観音が 5000 体くらいあります。木曾は馬頭観音の宝庫です。特に多いのが馬の産地の開田村です。村の石造物が 1908 体ありますが、そのうち馬頭観音はなんと 1241 体です。この数は全国一です。一番古いものは今から 339 年前の延宝 3 年に建てられています。また一枚の石に 33 体の観音像を彫った、全国に 3 例しかない非常に珍しいものもあります。このぐらい馬に対する信仰が篤かったということです。

木曾の三大観音は、木曾義仲が祀ったと言われる日義村の木曾駒高原の頂上にある岩垂観音。大桑村の岩出観音。それから開田村にある丸山観音。これは地元の人たちが丸山と呼ぶ、小高い山の上にありますね、非常に古いお堂です。祀ってある観音様は今から 283 年前に寄進された石の観音様で、下のお堂には馬の実物大の馬の像や絵馬があります。この丸山観音の縁日は 4 月 8 日です。この季節なのでちょうど雨月祭礼と呼ばれていました。毎年、馬の子が生まれるとこの祭りにはお参りに来たりして賑わったそうですが、今はそんな賑わいはありません。

馬頭観音は石に刻んだものがほとんどですが、開田村のある農家には馬の頭がい骨の観音様を祀ってあります。これは非常に珍しいです。かなり古いので年代は分かりませんが、結局馬は家族の一員だから、いつも家の中に置いておきたかったのでしょう。頭蓋骨を箱に納めて、箱の入口を剣の形に切って、くりぬいてあります。そこから頭蓋骨を拝めるようになっています。そこまでして大事な馬の霊を祀った、農家の優しい気持ちの表れではないかと思います。

高森町にも、先輩たちが調査した資料がありまして、馬頭観音が 370 体ほどあります。このうち 310 体くらいは文字で彫った観音様です。後の残りの 60 体ほどは観音様の顔とか馬の顔とか彫ったものです。文字で彫った観音さまで一番古いのは千早原にある 291 年前の享保 8 年のものです。顔を彫ったもので一番古いものは、山吹の光明寺にあります。今から 274 年前の元文 5 年のものです。上市田には町で一番大きな馬頭観音があります。

この 370 体という数からみても、いかに高森町でも多くの馬が飼われていたかがお分かり頂けると思います。

12 むすび

最後に木曾馬の保存と復活についてお話しします。

木曾馬保存会と岐阜大学とが協力して、木曾馬の遺伝子バンクを設立しています。今は、大学でも農学部には畜産科がある所がないんですよ。信大もない。名大の農学部にもありません。岐阜大学は生物応用で遺伝子の研究をして、木曾馬保存会と岐阜大学とが協力して、木曾馬の遺伝子バンクがなんとか純血に近い木曾馬の保存をしていこうと取り組んでいます。しかしいったん絶滅した大型家畜をこの世に戻すのは大変な作業なんです。

馬に限らず、動物は数が減るほど近親交配が進んでだんだん劣化しちゃうんです。遺伝子病が出てきて大変なことになります。このバンクでは木曾馬の血統の濃い血液を採取して遺伝子を分析して、その情報を登録しておくんです。近親交配を避けるために、精子を採取して凍結しておいて、何代か置いておいて戻し交配をしています。今、御岳山麓の開田高原の木曾駒の里では、戻し交配をした純系の木曾馬が、20 頭程飼われております。やはり木曾馬というのは山里の風景になじんで、非常にのどかです。こうやって保存して行くんですが、経済家畜ではないということで、もう農家からも見切りをつけられて、これから木曾馬がどのくらい保存で数を増やせるかは未知数だと思っております。

この講座の初めでもお話ししたように、現在純系の木曾馬は 160 頭程になりました。まさに絶滅危惧種です。これも軍馬に向かないからという人間のご都合主義で、外来馬との改良をしてきた結果です。こうやって話しておりますと、木曾馬の悲しげな鳴き声が聞こえてくるような気がします。私は 40 年前に第 3 春山号の取材を通

して、木曾馬のことをいろいろな方から親切に教えていただきました。しかしその方たちも、ほとんど世を去っていかれました。木曾馬の里も今や限界集落で絶滅寸前です。

私たちの周囲を見ましても、農薬の普及や環境破壊でどんどん貴重な動植物が姿を消しています。豊かな生活を追い求めるあまり、地球温暖化が進んで、大変な気象変動も起きています。人間が木曾馬を悲劇に追い込んだつげが、やがて人類にも戻って来るのではないかと危惧しながら、今日の話が終わらせていただきます。